

## 二、五徳終始説と説卦伝

前節で、劉向が易説を用いて災異記事を解釈し、『洪範五行伝』による災異分類を『周易』説卦伝を多用しながら解説した（もしくはそのような解説に依拠した）ことを論じた。本節では、劉向が説卦伝に基づいて五徳終始説を改変したことを紹介し、併せて説卦伝そのものが如何なる構造を持っているかについて考察する。

### 劉向の五徳終始説

『漢書』卷二十五下 郊祀志下の賛には、「劉向父子」が提唱した五徳終始説について言及している。

劉向父子以爲、帝出于震、故包羲氏始受木徳。其後以母傳子、終而復始。自神農黃帝、下歴唐虞三代、而漢得火焉。故高祖始起、神母夜號、著赤帝之符、旗章遂赤、自得天統矣。

劉向父子は次のように言う。『帝は震より出づ』とあるように、包羲氏が最初に木徳を受命した。その後、母より子に伝わるという五行相生の順に従って徳が移り、水まで来て終わるとまた木から始まった。神農・黄帝から以下、唐・虞・三代を経て、漢が火徳を得たのだ。そのために、高祖が決起した時に、神母が夜に啼き、赤帝の符瑞が生じた。そして高祖は旗じるしを赤くし、自ら天の統を得たのである」

それまでは、「黄帝（土）→夏（木）→殷（金）→周（火）→」という五行相勝の順に基づき、漢朝の徳運は水もしくは土とされて来た（前章第一節参照）。一方、漢志の賛によれば、劉向父子が五行の相勝ではなく

相生の順に基づき、「包羲（木）→……→神農→黄帝→……→唐堯→虞舜→夏→殷→周→……→漢（火）」という、従来とは全く異なる五徳終始説を唱えたという（1）。

劉向父子が何故このような説を唱えたのかについては、諸説ある（2）。そして、いずれの説にも不足や批判の余地があり、定説は無い（3）。現存する資料を素直に読む限り、劉向説について分かることは、以下の三点である。説卦伝を根拠にして最初の帝王を木徳包羲氏としたこと。包羲氏以降は五行相生の順に五徳が変遷したと考えたこと。そして、漢の徳を設定するに当たり、王朝創設者である高祖に関する赤帝伝説を重視し、火徳としたこと。

ここで注目すべきは、劉向等が『周易』説卦伝の文「帝出于震」を根拠にして、黄帝よりも前の、最初の帝王として木徳の包羲氏を設定したことである。震☳が東方であり、五行の木に当たるといふのも、説卦伝の文「震、東方也」に依拠している（4）。

前節で考察したように、劉向はしばしば易説を用いて災異を解釈している。また、劉向『洪範五行伝論』の説（もしくは劉向が採用した説）と考えられる、『漢書』五行志に引かれる「説曰」は、説卦伝を多用して『洪範五行伝』を解説していた。そして、王朝の徳運を論じる際にも、説卦伝と五徳終始説をうまくつなげるために、前者の「帝出于震」を包羲氏のことと解釈し、後者の構造を作り変えるという処置を行っている。謂わば、説卦伝を中心にして、本来は相異なる五行説同士を、関連付けて論じたのである。

このように、劉向の五行説に於いて、説卦伝が重要な役割を果たしていることが分かる。

## 説卦伝の構造について

『周易』説卦伝は(5)、八卦を様々な事物に当てはめて列挙しているのが特徴である。例えば、動物や身体部位について、次のように言う

乾爲馬、坤爲牛、震爲龍、巽爲雞、坎爲豕、離爲雉、艮爲狗、兌爲羊。

乾は馬、坤は牛、震は龍、巽は鶏、坎は豕、離は雉、艮は犬、兌は羊に当たる。

乾爲首、坤爲腹、震爲足、巽爲股、坎爲耳、離爲目、艮爲手、兌爲口。

乾は首、坤は腹、震は足、巽は股、坎は耳、離は目、艮は手、兌は口に当たる。

このようにして様々なものを八卦に当てはめている。そして、五行についても、金が乾(6)、地(土)が坤(7)、木が巽(8)、水が坎(9)、火が離に当てられ(10)、五行も揃っている。

問題の「帝出于震」の句は、次の一節の冒頭である。

帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、説言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮。

帝は震から出現し、巽で齊(ととの)い、離で姿を見せ合い、坤で役を行い、兌で言を悦び、乾で戦い、坎で働き、艮で言を成す。

そして、この後に、この一節について解説した字句が続く。

萬物出乎震。震、東方也。齊乎巽。巽、東南也。齊也者、言萬物之絜齊也。離也者、明也。萬物皆相見、南方之卦也。聖人南面而聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也。坤也者、地也。萬物皆致養焉、故曰致役乎坤。兌、正秋也、萬物之所説也、故曰説言乎兌。戰乎乾。乾、西北之卦也、言陰陽相薄也。坎者、水也、正北方之卦也、勞卦也、萬物之所歸也、故曰勞乎坎。艮、東北之卦也、萬物之所成終而所成始也、故曰成言乎艮。万物は「震から出現」する。震は、東方である。「巽で齊(ととの)う。巽は、東南である。齊うというのは、万物が清め整えられることである。離は、明であり、万物が姿を見せ合う、南方の卦である。聖人は南面して天下の聴政を行い、明に向かつて治める。これは離卦に基づくからである。坤は、地である。萬物がここで養育を行い、そのために「坤で役を行」うのである。兌は、秋の最中であり、万物が悦ぶ時節である。そのために「兌で言を悦」ぶのである。「乾で戦」う。乾は、西北の卦である。つまり、(戦うとは、)陰陽が迫り合うことである。坎は、水であり、真北の卦であり、働いて止まない卦であり、万物が帰り着くところである。そのために、「坎で働」くのである。艮は、東北の卦であり、万物が終わりを成し、また始めを成すところである。そのために、「艮で言を成」すのである。

ここで、「帝出乎震」の一段の列挙する八卦の順「震→巽→離→坤→兌→乾→坎→艮」は、すなわち「東→東南→南→西南→西北→北→東北」という順である。また、東方にあたる震卦について「萬物出于震」と述べ(春は万物の出現する季節)、西方にあたる兌卦を

「正秋」と述べていること、東北の艮で万物が終始すること等から、「春分→立夏→夏至→立秋→秋分→立冬→冬至→立春」という季節の推移も表現していると考えられる。

そして前述の通り、離卦は火、坎卦は水に当たる。つまり、南方が火、北方が水ということになる。同様に、東南巽は木、西南坤は土、西北乾は金に当たる。これらを整理すると、左の表のようになる。

震	巽	離	坤	兌	乾	坎	艮
東	東南	南	西南	西	西北	北	東北
春分	立夏	夏至	立秋	秋分	立冬	冬至	立春
木	火	土	金	水			

このようにすると、「木→火→土→金→水」、つまり「以母伝子」という五行相生の順が見えてくる(11)。

劉向は『周易』説卦伝の「帝出于震」に基づき、最古の帝王として木徳の包羲氏を設定した。それだけでなく、歴代王朝の徳運について、五行相生説による変遷を唱えたことも、説卦伝による五行変遷の順から影響を受けているように考えられる。

ただ、説卦伝のこの段の字句は、季節の推移を示している。春東方に万物が出現し、夏に盛んに姿を現し、秋に実りの悦びや戦争があり、冬北方は万物が帰って行く収蔵に当たる。少なくとも、王朝交代史を示した文言として読むのは無理である(12)。

劉向の五徳終始説における説卦伝の用い方は、五行の配当や循環原理とい

った抽象的な次元によって、本来異なる話題であるのにも拘らず、互いの字句や構造を関連させるという手法と謂える。すなわち、一年が春(震卦)から始まるように、王朝交代史(人類史とも謂えるかもしれない)も木徳から始まるべきと考えた。また、春(震・巽)から夏(離卦)、中央土(坤卦)、秋(兌・乾)を経て冬(坎)に至るのと同様に、王朝の徳運も木から火、土、金を経て水に至り、そして再び春が来るのと同じく木徳へ戻って来る。このように、季節の推移と類似している。

類比し、統一させるだけであれば、五徳終始説の五行相勝に従い、説卦伝を並び替えても良かったはずであるが、劉向父子はそうしなかった。それは恐らく、『周易』が経書であることに加え、易に、季節の循環・王朝交代、更には天文・律暦に共通する根源的な原理を見出したからではないだろうか。劉向の子劉歆については、劉向よりも多くの資料が残っており、易を特別視していたことが、更に詳細に確認できる。これについては次章で考察する。